



# 仲間と共に

学校目標 「めあてをもち 仲間と共に やりぬく心」

令和6年11月1日

日々の「営み」の中に、「対話」を加える！

校長 石田耕太郎

校庭の国旗掲揚塔のところに、1本のアラカシの木があります。常緑広葉樹であるアラカシは、いつも青々とした葉を茂らせているため、その下には日陰ができ、暑い夏の日には日陰を求めた子ども達が涼んでいる姿が見られます。また、アラカシはどんぐりの実をつける木でもあり、今の時期になるとたくさんどんぐりを実らせています。ある日の朝、アラカシの木の近くにある朝礼台の上にどんぐりの実が無造作に置かれていました。そのどんぐりの実気付いた時、前日の放課後まさにこの場所で子ども達がどんぐりを拾い、その実で遊んでいた光景が脳裏に広がりました。この場所には、今は居ないけれども確かに子ども達の「営み」があったのです。「何人くらいで遊んでいたのだろうか？」「どんな顔をして遊んでいたのだろうか？」「どんな思いでどんぐりの実を拾っていたのだろうか」私の中で次々と疑問がわき出していきます。朝礼台に置かれたどんぐり。たった一つのその事実が、私に多くのことを考えるきっかけを与えてくれました。



2024年10月11日ノーベル平和賞に日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）が受賞することとなりました。その受賞理由は、「広島と長崎の被爆者たちによる草の根の運動により、核兵器のない世界を実現するために努力し、核兵器が二度と使われてはならないと証言を行ってきた」とされています。来年は広島と長崎に原子爆弾が投下されて80年になります。人類は広島と長崎の惨状から、核兵器がいかに私たちに悲惨な現実を突きつけるかを学びました。しかし、今世界に目を向けると、当時よりはるかに強力な破壊力がある核兵器が存在し、何百万人もの命を一瞬で奪い、気候にも壊滅的な影響を及ぼし、果ては文明を破壊する可能性が指摘されています。それにも関わらず、その脅威はなくなっておられません。こうした世界の現状に対し、日本被団協の被爆者の立場から核兵器廃絶を訴えてきた活動が評価されました。自身が体験したことを語ることを通して、核兵器廃絶を継続的に訴え続けてきた「営み」。そして、世界から核兵器が廃絶されるその日まで続けられるであろう「営み」。この営みは、今新しい世代へと受け継がれ、被爆者の方々の経験とメッセージがこれからも世界へ伝え続けられることは間違いないことでしょう。

岐阜市在住の日本被団協事務局長である木戸季市氏は、「世界に強く訴えたいことは、紛争をなくすために必要なのは武力ではなく「対話」だということ。そして世界はそちらのほうに向かっていると強く感じています」と受賞に対してコメントされました。

私たちは日々、多くの事実に向き合いながら生活しています。その事実から様々なことを感じ、考え、次の行動へとつないでいます。その営みの中に「対話」を加えること。それこそが、より豊かな行動が形作られるものであると信じています。